

広島文教女大短大 岡田ハナコ

○内藤 昭子

1. 広島県が全国生産の95%を占める手縫針について、その生産及び消費状況等の実態把握にもとずいた錆の研究、針の形状と運針の関係、めど通し、めどずれ、通り荷重、折れ曲り等についての研究に引きつづくものである。能率的な手縫針により完全な縫製の役目を果たすためには、その案内役としての待針の重要性に留意し、今回はこれについて検討を試みたものである。

2. 資料としての待針は市販の和裁用及び洋裁用待針（ガラス、セルロイド、プラスチック、パール等）をとりあげ、四種の試布により、長さと能率、その打ち方と脱落の関係、針先の形とみごろの抵抗及び曲りについて検討を行ない、頭部の材質とアイロンの温度、形状と能率の関係を調査すると共に、試作待針による検討をも加え行なった。

3. 和裁専用としては、在来の和裁用待針は能率面から長きに過ぎ、洋裁用のそれを兼用する為には、おち易いので重心に対して打ち方の工夫を要する。針先及びみごろの抵抗については、既報の手縫針の場合と同理由が成立する。現状での60カーボン硬鋼線を素材にした過程での待針は、先曲りを防ぐため先付工程を入念に、研磨工程を加え、メッキした後ガラス頭部をつけたゲージ24長さ36.4mmの試作針が好ましい結果を得た。